

和田傳全集

第三卷

和田傳全集 第3卷

定価 2,800 円

昭和五十三年五月二十五日 発行

著 者 和 田 傳

発 行 者 高 橋 芳 郎

〒162

東京都新宿区市谷船河原町十一

発 行 所 社 団 家 の 光 協 会
法 人

電 話 (260) 三 一 五 一 (大代表)

振 替 東 京 5 1 4 7 2 4

印 刷 三 松 堂 印 刷 株 式 会 社
製 本 寿 製 本 株 式 会 社

和田傳全集 第三卷

和田傳全集（第三卷）目次

貧窮曼陀羅	生活の畝	のぼり坂	地下茎	土塊	少年	家長
279	256	241	188	148	134	5

解説

貧 富

370

小綬鶏と狐

364

小便大尽

358

鶏と蒺藜草

345

桑悶着

332

蚕 酒

324

負債の構図

312

赤星虎次郎

装幀 舟橋菊男
題字 久住和代

家　　長

一

お滋が九沢村の山根家に嫁ぐ縁談がまとまると、驚くというより誰もすぐにはそれをほんとうとは思わなかった。人物同士というより、家風とか家柄とか財産とかの釣り合いの方を重く見る田舎の人々のことであつてみれば、たしかに、にわかにはほんとうにはしない人々の常識の方が穏当であつたかも知れない。それほどお滋の生家と九沢村の山根家というのは、どこから見てもおおよそ縁談などというようなもののはじまるような相手ではなかつた。

ふしぎなことがあるものだと、親類の人たちは誰も驚いたのである。そして、誰も、不幸な生まれつきのお滋を不憫に思うのであつた。そう思うことで、誰も、一応その縁談を理由づけ、そして、たとえ「小便大尽ばばじん」とか「乞食大尽」とか言われても二、三倍の財産はある家に嫁ぐお滋を、それでも、末は幸せだらうという考えの方へ傾こうとしたのである。

お滋は平田村の鹿子木家の長女には相違なかつたが、母親がほんとうではなかつた。つまり彼女一人だけが先妻の子という世間に嫌われる生まれつきである。そういうことは、縁談などにはひどく不利な条件になるので、

べつに何の不自由もない七町歩地主の長女ながら、末はせいぜい自作農あたりへ嫁ぐしかあるまいと人々は見ていたのである。かと言って鹿子木家の長女のお滋が、自作農家のかみさんになるということは、実は、誰にもまじめには考えられなかった。あんまりそれでは不憫でもあり、痛々しいと思われた。何故なら、わずか七町歩地主とは言っても鹿子木家の家の格ははるかにそれ以上で、家格も、生活の度も村では一流の資産家並みと自他ともにゆるしているのである。

昔は名主を代々つとめ、それほどであったから家づくりも堂々とした大家風で、庭のづくりも植木も雅致をきわめた、一村に二軒とはない構えである。お滋の父親の幾之進は、その名前からして田舎にはめずらしいように、幼時から南画を修め、長じて小学校の訓導となり晩年は校長までつとめ、恩給とりとなってその頃は隠棲の身分となると、晴耕雨読、興到れば彩管をとって終日ひとりたのしむといった、これも田舎には極めて稀な人物と言ってよかった。そういう父親の下で、お滋は、硯は支那の端溪に限るなどと教えられ、墨は蘇州のものがいいなどと聞かされて育った娘なのだ。

田舎ならせいぜい自作百姓だが、都会ならそんなこともなからう。都会なら大学を出たくらいの者のところへははまるかも知れないと人々は思っていた。

それが二、三倍もある、十七、八町歩は持っている大きな地主の山根家とお滋の縁談はまとまったのであった。末は幸せであらうとは、しかし、お滋の不幸せな身の上を不憫に思うあたかい心が言わせたものようである。でなければ、それほどの大大家へ嫁ぐことになったことを羨ましがる、これは主としては女たちの冷たい心が言わせた反語のようであった。

九沢村の山根家というのは、小便大尽と罵られ、乞食大尽などと貧乏人たちからは悪態をつかれる地主であ

った。いまはもう亡くなった平左衛門という先代の名から「ヘーザヘーザ」と呼び捨てにされるうちにそれが屋号みたいになり、「九沢村のヘーザ」でいまの若い当主の平作も呼ばれている。ヘーザヘーザと貧乏人からも誰からも呼び捨てにされるのである。

平左衛門殆んど一代でつくりあげたそれだけの身代であった。田舎の身代というものは株や相場の変動や政治環境の機会などで、つまり商人や工業家が一躍大儲けをやらかすような方法でつくりあげられたものではない。爪で拾うという言葉があり、爪に火をともすという言葉がある。つまり平左衛門は自身の生活はそういう最低を維持することを頑健に守りとげたのである。そして、金を貸し、高利をとり、担保としては田畑をおさえ、容赦なくそれを取りたてて情に屈するということをかつて知らずに一生を終わつたのである。一反、二反というふうに土地は平左衛門の手中にあつまり、でなければ二割、三割というような高利が彼のところに搾りあつめられた。しかし、平左衛門は依然として以前の平左衛門で、一生を青縞木綿の野良着にくるまって過ごし、そのなりで荷車を曳いて町へも行けば、そのなりで出られないようなところへは初めから出なかつた。昔、彼の小作人が、白い飯が腹さんざ食えるのは正月の三日きりであると泣き言を言うと、馬鹿野郎、おらなんざ長い着物を着るのは正月の三日きりだと応酬したというはなしは、いまも一つばなしになっている。

それだけの大身上でありながら母屋も土蔵も物置も茸のような藁葺きをとうとう葺きかえずにしまい、庭木一本植えるということをしなかつた。屋敷には太い樗が三本ほど生い繁っていたが、これほどの庭木はあるまいと言いつつ。四脚門だけはそれでもあつたが、ところもあろうにその門につづけ、豚舎を建てつらねて平気であつた。門を入るとすぐ目につくところへはいれいしく堆肥の山を積みあげ、子供のおしめを干してはばからなかつた。

その平左衛門の妻きちがいまも健在で、しゃんしゃんやっているのである。夫になる平作はとって二十七歳、郡立の農業学校を卒業するとすぐ家業を継ぎ、いくばくもなく家督を嗣いだが、実権はまだきちちの方にあった。後家になったきちちの家長ぶりは平左衛門に少しも劣らず、五円の貸しの催促に片途二里半、往復五里の山路を手づくりの藁草履で歩き抜くといったしたたかものであった。手づくりの草履と言えば、きちちが土間の蓆の上で大あぐらをかき、藁屑をかぶりながら草履を編んでいる図は、貧乏人のかみさんも顔まけのていたらくだと噂されたが、彼女に金借りに行くためには、間違っても買ひものの履物を穿いて行ってはならぬということになっていた。そのきちちの草履づくりは六月や九月や暮れにとくに忙しかった。六月には藪や妻がとれ、九月には秋藪が、暮れは米がとれるので、きちちが貸金の催促に駆けずり廻ることで忙しかったが、いつもその草履で廻り、往復五里の里程は遠いとは言わなかった。

鹿子木家と山根家とのそんな相違は、また同時に鹿子木家の平田村と山根家の九沢村との相違でもあったのである。平田村は相模川の流れに沿い、流域の一面の平野に美田を並べている村である。田場所と昔から呼ばれ、そこでは貧乏人までが年中白い米を食い通すと言われ、生活の度も高く、嫁にやるなら田場だと親たちも言い、娘たちもゆくなら田場所と昔から言ってきた、その田場所のなかにある村である。田はよく、うしろに丘を背負ってその上には畑もあった。東海道にも近く、当時小田急の路線も着々と竣工しつつあった。バスはすでに県道を通り、荷馬車がしだいに影をひそめてトラックが砂塵を捲きあげていた。目の先に厚木の町が、その家並みを相模川の水の中に倒し、夜になるとキネマ館のオーケストラの音が村まではっきり聴こえてくるのであった。

一方九沢村というのは相模平野も西にきわまった、丹沢山塊の山並みのなかに、まるで茅野のなかの貉の巢みたいに、その窪みに、日向をもとめてわびしげなむらをかたちづくっている九つのむらから成って、九つの沢

があるところからその名で呼ばれ、その沢ごとにむらがあるのであった。いずれも眺望というものを持たぬ山峡の底のむらむらで、日ののぼるに遅く没するに早く、冬は雪が吹きこみなだれこみ、夏は釜の底みたいに暑いのである。

生活の度は言うまでもなく低く、陸稲の飯を食い、それがなくなれば麦を食い粟を食い、蕎麦を食っていた。魚は正月か村祭りのほかに食う者はなく、その山塊の村々から厚木の中学や女学校に送られる子女は寄宿舎に入るのであったが、彼等はそこで刺し身が食えないということでは有名であった。生臭く、気味が悪く食うに堪えぬというのがその言い分であった。自然や地利に恵まれること少なく、かわりに最低の生活に堪え、最大の労働に堪え、忍苦や艱難に精根を鍛えに鍛えなければ生活が保証されぬという山村である。

嫁を貰うなら山方からとは、これも昔から言われてきている言い種である。嫁はそういう生活の度の低いところから貰うことの有利であることが実証されていたのである。つまり、嫁にやるわが娘は東の田場所へ、息子にとるべき嫁は西の山方からというまことに虫のいい考えが、昔からここの平野の人々の頭には滲みとおっているのであった。

お滋の結婚は、そういう在来の通念や常識からすればひどく桁はずれな相手方と取り結ばれたのである。

中に入つてこの縁談を取り決めたのはお滋の父親のやはり昔の教員友達であったが、ふしぎとその山根平作ならわずか半年ほどだったけれど幾之進も教えたことがあったと言ひ出し、案に相違して幾之進が誰より乗り気になったのであった。少し過ぎるくらい無口でそのくせ勝ち気がつよく、頭もよい子であったと幾之進の記憶には残っていた。農業学校時代の平作を町で見かけたことも屢々あったが、見るからに大自作農の跡継ぎ息子らしく、からだも逞しければ精神も剛健であるように映った。その頃すでに山根は幾之進などよりはるかに大きな地

主なのであったが、そういうことにはあまり興味も関心もたぬ彼は、やはり見るからに大自作農といった感じの通りに漠然と考えていたようである。そうした漠然とした考えを幾之進はそのまま持ち越し、ついにあらためるといふことをしなかったが、お滋の縁談が成立してしまつたのも、実は、そのためだつたと言えるのである。

何故なら、その縁談がかれこれまどまどしてしまつて、幾之進は山根がいまはそれだけの大地主にほきあがつてゐるということをしなかつたのであつたのである。それをはじめから知つていけば、幾之進もそくざに辞退してしまつたに相違ないのだ。山根ときいてやはり彼の頭に蘇つたのはその大自作農家といった感じで、次に、いまは恐らく彼のところよりは大きくなりあがつてゐるにちがひないとは思つたが、そのかわりには彼の方の家の格が頭にあり、それを釣り合はぬ相手同士のように少しも思わなかつたのである。

その誤認をはつきりと知り、その釣り合はぬ資産の状態から幾之進があわてて辞退を شدした頃は、もういまになつて引くにも引けぬところまで事はまどまどつてゐた。元來田舎の人にはめづらしく、そういつたことに恬淡であつた彼のこと、一応あわてだしはしたものの、言いくるめられると存外その気になり、べつにそのことで頭を悩ますようなこともなかつた。

資産に就いての数字的な誤認は大いにあつたものの、しかし、山根家の家格や家風といったものに就いての幾之進の認識は少しもあやまつてはいなかつたのである。してみると、そういつた山根家との縁組にはじめから乗り気になつた彼の気持ちは、どういふところにあつたのであろうか。そういつた家の主婦として、彼のところのお滋がはまり役だなどは、まちがつても思われぬことであつた。しかし、そのことを彼は誰に向かつても言うことをしなかつた。はらでは厄介者扱いに思つていたでもあろう後妻は、そのことで異議を唱えるというようないことはしなかつたし、また、お滋自身は、父親の思うことに対しては、さからうといふことを嘗つて知らない絶

対に柔順な娘であった。

やはり口は重く、自身の正しいことを信じてさえいればそれでいづもしづかであられるといった風の幾之進は、彼のはらのなかの考えはとうとう人には言わないでしまった。親類の者たちは、何と言っても水の中の一滴の油のようなお滋の存在を察していただけに、そのことで幾之進に問いかけるということをしひかえる者が多かった。そういう気持ちにはつきりと眼に見えた。それだけに、普通なら自ら進んでこちらから言い出すところであったのを、幾之進の性分がそれをゆるさなかった。

或いは逆手に、先方の資産の大きいことを言う者が稀にあったが、その時だけは、幾之進は気持ちの幾分かを披瀝した。しかし、それもそうせざるを得ないところに追いつめられたのを観念しての揚げ句のようで、決して進んで披瀝するという風ではなかった。

——そいつはおれの人間違いでな、おれはまた昔の村の学校にいてその頃のあの家を知っていたもので、いまもそんなものだからいぼんやり考えていて人間違いをやらかしたわな。昔は地主というよりは大きな自作農家だったな。自作百姓だが、それでもあの頃でも持ち地を言えば地主といった方があたっていただろう。それでも地主だなどと言う者はなかったようだった。……いまだって、そりゃあ十七、八町歩の地所持ちと言えば大地主な筈だけれどな、やっぱり、でっかい自作農と言った方があたってるとんじゃねえのかな。何だか、あの家が二十町地主だなんて考えるのはおかしくなるよ。なあに、地所をいくら持っても、それだけじゃ……まあ、山根はやっぱりいまでもでっかい自作農だろうよ。そう思っただけいいわえ。おら、そう思ってる。

幾之進はそんなふうに言ったのである。そして、その二十町歩地主の家を、はらから見下げている風な言い方をするのであった。

そんなにしてとうとう彼は本心は誰にもうちあけることをしなかったが、しかし、最後にそれをお滋にだけは言いきかしたのである。

興入れも近づき、諸道具や衣類も調べてそれらが彼の画室にあてている離れを埋めていた頃であった。

二月であった。牡丹の古木がぎっしりと植えこまれた、すでに霜除けの藁を剝いでその飄逸な木ぶりに生気が蘇っていた前庭に面した離れの部屋で、お滋とたった二人の時、幾之進はそれを言ったのである。

——うちのような家は、こんな暮らし向きをつづけこんな気風でいるうちのような家は、近いうちにもう駄目になる。はっきりとおれにはそれがわかっている。お前はこういうたぐいの家にはやらぬと、おれは前かららきめていたんだ。お前は生まれかわったつもりで九沢村の人間になるんだ。人間、生まれかわったつもりには、やさしいことであれんものだが、これからそのつもりになるんだ。……草履もつくれ。持ち地もすっかり頭の中に入れ、持ち山もおぼえ、山の木の名もおぼえるんだ。田へも畑へも出るんだ。……うちのような家が、いまにかならず駄目になってしまふってことを忘れるな。

そんな風に幾之進は言いきかした。お滋は黙ったままいちいちうなずいたただけであったが幾之進はくどくは言わなかった。そして、娘が見返してこないのを幸いに、彼はゆっくりと平手で涙を拭いたのである。

——地所を財産として持っていて、うちのようにそれが自分ではつかいこなせない。こんなべらぼうな暮らしをおれはこれまでして来たが、それでこういう時勢になり、小作人から田をあげる（返還する）と一言おどかされるとちぢみあがってしまうってまだまだわな。地所が財産なら、財産らしく、鍬棒握ってそいつをつかひこなせねえって法はねえんだ。そうでなけりゃ、財産が財産でなくなる時勢にかならずなるんだ。百姓としてのそういう実力がなく地所なんか持っている者がどうなるか、いまにお前にもそれがわかる時がくる。お前も知ってる

ように、ここ二、三年の間に、うちの地所の年貢の引き下げ方はどうだ？ 小作人の言いなり気なりにならなければならぬえわな。それでもこれが財産か、これでも宝か、……時勢はどしどし変わってくるんだ。……おれなんかはこの年だけれど、お前は九沢村へ行って生まれかわらなければ、かならず不幸せな日の目を見る。……佐十郎なんかも、新家の進のように弁護士になるの何のと言ってるけれど、おれはあれを農業の大学へやるつもりでいるんだ。あれも百姓にする。

二十三歳になっていたがお滋には父親の言うことがそんなによくはわからなかった。それは後年彼女の告白するところである。ただお滋はお滋なりのわかり方はした。年貢米は一年ごとにまけさせられる一方であった。小作人たちは何とか彼とか言い、そして、何とか彼とか言いに来るたびに年貢がまかされるのだということが彼女にもわかった。

小作人たちがお滋などに対する態度や物腰にも、そういった気配は感じられていた。小作人たちは以前ほどお滋などにもへいこらしなくなつたように感じられるのである。田をつくってやるんだと、いまじゃ小作人はそういう気持ちになつてしまつたと、幾之進は独り言のように長火鉢のわきで言うことが度々あつた。それはお滋にも納得がゆかなかつた。小作人はうちの田をつくらして貰つてゐるのではないのかと、そんな時彼女は心では独り言を言つてみるのであつたが、小作人たちのその頃の物腰を思い合わせると、おらたちがつくつてやらなければ田も水溜りも同じものじゃねえかとも言つてゐるみたいであつた。

自分で手づくりができたらなあ、父親はまた度々そうも言つた。手づくりするって七町歩もあるものをとお滋は心では笑つただけであつたが、しかし、そのことも新しくいまは心に來た。自分で鋤棒を握つて田のなかに入るだけの実力があれば、こうまでに小作人たちの言いなり気なりにならないで済むと、父親はそう言つてゐる

のだとは彼女にもわかつた。田へも畑へも出るんだと言いきかされ、それはどういふことなんだかはわからず、股引をはいたこともなかったお滋にはそれがじかに心には来なかつた。しかし、何よりも彼女は父親の愛情の深さを感じ、それをたよつて心をさわがさなかつた。まったくの信頼を彼女は父親にはかけ、かつてそれを疑つたことはなかつた通りに、その日もまったく同じであつた。

お滋はそれゆえ、はつきりとした所作で、幾之進の言うことをいちいちうなずいたのである。

かくてお滋は、丹沢山塊のなかの山蔭に、九沢村の山根家の嫁になつたのである。「九沢村のヘーザ」のころの嫁になつたのだ。

二

「小便大尽」とか「乞食大尽」とか言われる大尽是、どこの村にも、いつの時代にも、かならずあるものである。と言うことは、今日の田舎の「大尽」と言われる地主に就いて見れば、かならず、そういう名で呼ばれた一時代があつたということの意味するのである。

息子は大学を出し、娘は東京あたりの女学校を出し、洋服を着、つねに長い着物を着てもはや自らは農耕はせぬといった、身分の高い、いわゆる地主様で通っている大尽でも、さかのぼれば必ず何代か前には、そういう悪罵的な名前で呼ばれていた一時代があつたのだ。そういう一時代に、実は後世の地主様たる基礎がつくりあげられたのである。

田舎の資産家というものは、運と機会と才智でもって一躍大儲けをやらかしてなりあがつたものではないけれど、しかし、これもまた幾代もかかつてつくりあげたというふうなものでもない。多く一代である。これもやは